

御笠の森遺跡2 (400年前の遊び道具) 大野城市教育委員会



写真1 御笠の森遺跡から出土した羽子板と独楽

上の写真は、大野城市山田にある「御笠の森遺跡」から出土した羽子板と独楽です。どちらも江戸時代はじめごろ（約400年前）の屋敷の周りを囲んでいた溝の中（写真2・3）から発見されました。こうした遊び道具が、当時農村部だった地域で発見されることは大変珍しく、そこに住んでいた人々の暮らしが、いきいきと感じられます。

羽子板は長さ29cm、幅8cmほどの大きさ、独楽は高さ4cm、幅3cmほどの大きさで、写真ではよく見えませんが、独楽の先端には軸棒を入れた穴まであいています。現在私たちが目にしているものと、ほとんど変わらない形であることがわかるでしょうか。

では、日本の伝統的な遊びともいえる独楽や羽子板、囲碁や将棋などは、いつからどのようにして私たちの生活に取り入れられたのでしょうか。

羽子板 最も古い古文書の記録は室町時代中頃むろまちです。同じ時代の辞書には「正月にこれを用いる」と書かれていて、すでにお正月の行事であったことがわかります。また当時は、「胡鬼板こきいた」とも呼ばれていて、鬼（=病気や災い）を板で追い払うことを目的としたり、幼い子供が蚊かに刺されないための、「おまじない」であったと考えられています。江戸時代（特に申頃）になって、庶民しよみんの遊びとして広まっていったようです。

独楽 「こま」という名称は、唐（今の中国）から朝鮮半島の高句麗（高麗：こま）という国を通じて日本に伝来したことから名付けられたといわれています。日本に伝わったのは飛鳥時代で、奈良時代には朝廷行事の余興として使われていました。その後長い年月をかけながら、多くの人々（特に子供）に親しまれる遊びとして定着したようです。

囲碁 御笠の森遺跡からは、白色と黒色の碁石も発見（写真5）されています。この囲碁の歴史は非常に古く、中国から日本に伝わったのは、約1400年前ともいわれています。そして奈良時代や平安時代には宮中の遊びとして定着し、奈良県にある正倉院には聖武天皇愛用の碁盤ごばんが残されています。その後中世には、武士や僧侶の間でも盛んに行われるようになり、さらに江戸時代には大人の遊びとして、庶民にまで広く親しまれるようになりました。またこの頃には、博打ばくちの道具として盛んに使われていたことも知られています。

これまで、3種類の遊びを見てきましたが、これ以外にも将棋しょうぎや双六、竹とんぼ（木製）など古代から伝わる遊びはいくつもあります。最近めっきり見ることが少なくなったこれら遊びには、長い歴史と先人たちの知恵が詰まっているのです。この機会に、なつかしい遊びをもう一度見つけ直してみてもはどうでしょうか？



写真2 御笠の森遺跡



写真3 羽子板が発見された様子



写真4 独楽



写真5 400年前の碁石(手前)と現代の碁石(奥)